

星ナビ10月号 表紙疑惑を検証する

星ナビ編集人：川口雅也+編集部スタッフ一同

今さら確認するようなことではありませんが、「星ナビ」は、投稿して下さる読者の皆さんや、記事を書いて下さる著者の皆さんとの信頼関係の上に成り立っています。編集部が、多くの読者の意見や要望を容れながら著者の皆さんに原稿をお願いし、それを毎月「星ナビ」という雑誌のパッケージにまとめて読者の皆さんにお届けしているわけです。読者のみなさんからの投稿文を読んだり、掲載する天体写真を選考する時においても、投稿文に不実が含まれていないことを前提に編集をしています。

ところが、こういった信頼関係を根本から覆すような指摘が相次いで編集部に寄せられました。先月の「星ナビ」10月号の表紙画像が、盗用されたものではないかというのです。

10月号の表紙画像は、沖縄県の宮城隆史氏から提供されたもので「2009年7月22日に、中国の杭州および鹿児島県喜界島で撮影した多数の画像を素材として作成した」という趣旨の説明文を同号の目次ページに記載しました。宮城氏自身は天候に恵まれなかったものの、宮城氏の協力者2名が、幸運にも雲間を突いて比較的クリアな条件で撮影に成功し、その画像素材を使って各種の画像処理を施したということでした。

浮上したふたつの疑問点

この画像に関する第1の疑問点は、コロナ画像の中に認められる恒星と太陽との相対的な位置が、中国の杭州および鹿児島県喜界島で撮影された場合のそれと大きく異なるということでした。太陽の天球上の位置は、地球の公転によって天の黄道上を1日におおよそ1度の速さで移動しています。つまり、日食の観測地が大きく異なり、皆既を迎える時刻も大きく異なるならば、太陽はその間に黄道上

を移動し、天球上の位置、つまり恒星との相対的な位置が違ってきます。

皆既日食時における太陽の天球上の位置は、天文シミュレーションソフトを用いることで調べることが可能です。編集部でこの点を独自に検証したところ、中国の杭州および喜界島で撮影された場合と、恒星の位置に約5分角の差異がありました。恒星の位置は、太平洋上のマーシャル諸島付近で撮影されたことを示唆するものでした。

第2の疑問点は、この10月号表紙画像のコロナの描写が、チェコ共和国ブルノ工業大学機械工学部数学研究所のMiloslav Druckmüller氏がWebページで公開している画像のそれと酷似しているということでした。

編集部では、Druckmüller氏らのコロナ画像と、宮城氏のコロナ画像を画像処理ソフト上で重ねて検証してみました。その結果、完全に一致しない箇所が部分的に見られるものの、コロナの流線構造や恒星の位置が、偶然ではありえないほどの整合性があることを確認しました。

コロナは、同様の光学系を用いて、同じ場所から同じように撮影すれば同じような描写となります。しかし、画像処理を加えた後の描写はそうはなりません。たとえ同じ撮影元データから画像処理を進めたとしても、画像処理の流儀や作者の作画に対する考えの違いによって、調子の異なるコロナ画像となります。ましてや、天候や撮影機材・露出条件などが違えばなおさらです。

さらに決定的だったのはDruckmüller氏らのコロナ画像の撮影地が、マーシャル諸島のエニウェトク環礁だったことです。第1の疑問点と、第2の疑問点がここでつながったわけです。

矛盾する宮城氏の証言

以上のような検証を踏まえ、画像の提

供者である宮城隆史氏に「中国の杭州、および、喜界島で撮影したというコロナ画像の恒星の位置が、マーシャル諸島のそれと一致するのはなぜか？」と問うとともに、「どのような画像処理を施したのかを、撮影元素材一式と画像処理の中間過程を示して説明してほしい」と連絡しました。それと同時に、Druckmüller氏に、この経緯を報告し「私たちは、宮城隆史氏の回答を待って、この疑惑の真偽を判断しようとしている」との旨を伝えました。

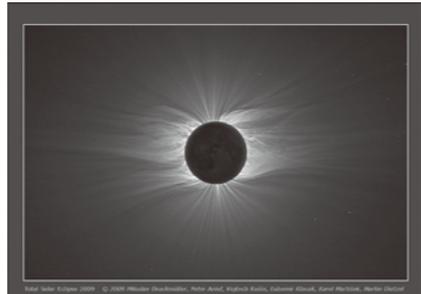
宮城氏からの返答は「撮影地は中国の杭州と喜界島ではなく、喜界島とマーシャル諸島だった」「チェコの人(=Druckmüller氏)の画像を参照しながら、画像処理した」という趣旨のものでした。

ここまでの経緯は、9月18日公開のアストロアーツWebニュースで概要を報告するとともに、「星ナビ編集部では、この件について、引き続き宮城氏に説明を求めている」としました。

その後も、編集部からの問い合わせに対する宮城氏の返答は二転三転し、説明



「星ナビ」2009年10月号表紙(上)と Druckmüller氏らの、2009年7月22日の日食画像



Corona up to 6 solar radii

80 images were taken during 1.5 m 41.5 long totality by means of Canon EOS SD digital camera equipped with my old red-line Russian Helios-100mm f.4.5/2000 mm. Unfortunately the absolutely clear weather several minutes before the totality was interrupted by a small cumulus cloud and a part of the total eclipse was lost. After careful inspection of all eclipse images 28 images which were not influenced by clouds were chosen. These images were calibrated by means of about 200 dark frames and about 200 flat-field images. The resulting images fit finally over my expectation and the influence of clouds nearly negligible. The position of the Moon represents the situation 136 seconds after the second contact (i.e. 07:30:33 UT) (13:30:33 local time). The display of the solar corona, lunar surface and stars at the reference image are highly dependent on the quality of human eye.

にも矛盾点が増えていきます。そこで、「状況証拠をもって、編集部の責任において判断する」旨を伝えたと、9月25日になって、宮城氏から「一連の不正を認め、謝罪したい」という意を得ました。

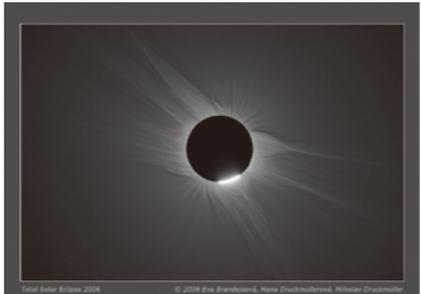
繰り返された不正行為

宮城氏によると、「星ナビ」2009年10月号の表紙画像は、Druckmüller氏がWebページで公開している画像を無断で複製加工し、撮影データとコメントを偽って発表したものだということでした。

また、2008年6月号の表紙画像も、Druckmüller氏がWebページで公開している画像と酷似していることを見出し、この点でも事情説明を求めました。宮城氏によると、この号の表紙画像に関しても、Druckmüller氏のWebページから無断で複製加工し、リビアで撮影(オリジナルはトルコ)したとコメントを偽って発表したものだということでした。なお、2008年6月号表紙画像は、当社が編集・発行したムック「皆既日食2009」の2~3ページにも掲載しています。



「星ナビ」2008年6月号表紙(上)と、 Druckmüller氏らの、2006年3月29日の日食画像



Diamond ring after the end of total eclipse

The resulting image was made from 62 digital images and a single image taken on a classical film. This combination makes possible to handle easily the long-exposure over area to extend. It would be impossible using a digital camera only. The classical negative film has an extremely high dynamic range which is highly over possibilities of the digital photography.

宮城氏からの謝罪文は9月28日に届きました。編集部では、宮城氏の謝罪文を Druckmüller氏へ報告するとともに、宮城氏が不正に複製加工した画像を掲載したことを謝罪しました。また、宮城氏は「星ナビ」読者に対しても謝意を表していることから、ここにその全文を掲載いたします。

《星ナビ日食画像についての謝罪》

Miloslav Druckmüller様
「星ナビ」読者の皆様
アストロアーツ星ナビ編集部
および 関係者の皆様

天文雑誌「星ナビ」2008年6月号、および2009年10月号の表紙に掲載された皆既日食画像は、チェコのMiloslav Druckmüller氏がWebページで公開されている画像を複製加工し、私の協力者が撮影した画像を合成するなどの不正な加工を施したものでした。

2008年6月号表紙画像は、複製加工した日食画像の色調やコントラストを調整し、角度を変えてトリミング、手書き補正加工などをしたものです。2009年10月号表紙画像も同様に複製加工した上で、私の協力者が喜界島で撮影した最内側のコロナやプロミネンス画像を重ね、画像周辺部のコロナの描写を手書きにて修正加工したものです。

いずれの画像もDruckmüller氏の日食画像を無断で使用し、合成や手書き補正など改変を加えた上で、撮影データを偽装し、私の名前で(2009年10月号表紙は撮影協力者の名とともに)発表しました。

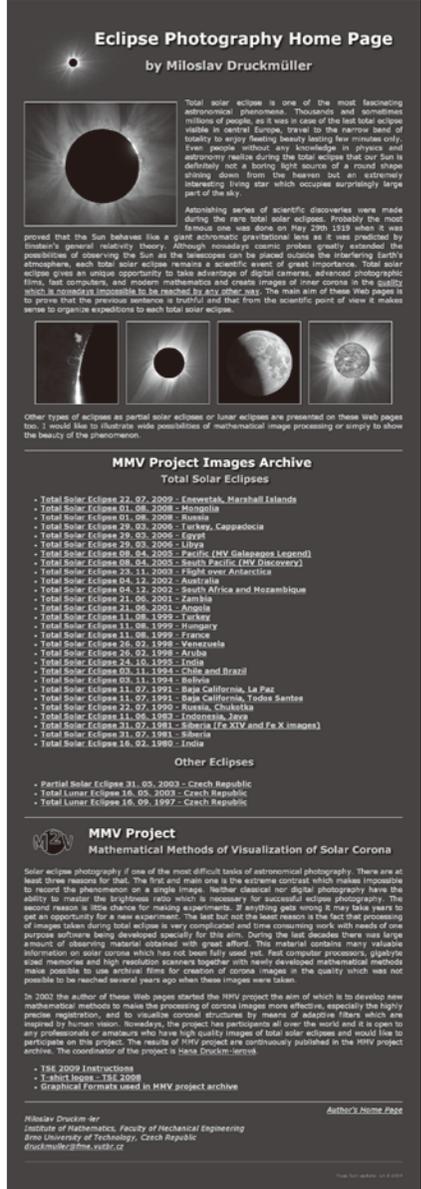
私は、これらの不正行為を認め、Druckmüller氏 および、「星ナビ」読者の皆様、アストロアーツ星ナビ編集部 および関係者の皆様に多大なるご迷惑をおかけ致しましたことと、非常に不快な思いをさせたことを深くお詫びいたします。

私は、これらのことを深く反省するとともに、二度と他の方の著作権を侵害するような表現行為をしないことを誓います。自ら(協力者も含む)撮影した画像素材を使い、コラージュ合成、イメージ合成などを施した場合も、その加工過程を明確に説明文に記すことを誓います。

2009年9月28日 宮城隆史

■アストロアーツWebニュース「星ナビ2008年6月号の表紙画像、および2009年10月号の表紙画像について」
http://www.astroarts.co.jp/news/2009/09/28hoshinavi_cover/ に関連リンク先URLを掲載しています。

Miloslav Druckmüller 氏のWebページ



「星ナビ」編集部としても、不正に複製加工された画像と虚偽の撮影データを掲載したことを、読者の皆さんにお詫びいたします。なお、この問題を受けて、今月号から「星ナビギャラリー」の作品募集要項に、「応募作品の著作権の確認のために、ネガ・ポジ原板やRAWデータなどオリジナルデータの提出を求める場合がある」「撮影データに重大な誤りがあったときは、掲載を取り消す場合がある」という2項目を加えました。また、今後の誌面において、この表紙問題が図らずとも提起することになった「デジタル時代の天体写真のオリジナリティをどこに求めるべきか」を模索し続けます。